

少年少女のための

7

現代日本文学全集



森坪内 鷗逍遙 外集

責任編集

久伊福

松藤田

潜清

一整人

少年少女のための

現代日本文学全集 7

森鷗外・坪内逍遙

定価 二五〇円

昭和三十一年一月二十八日初版発行

昭和三十一年一月二十五日再版発行

発行者 小嶺嘉太郎

発行所 東西文明社

東京都千代田区神田神保町二ノ二一

東京印刷株式会社  
製本 藤田製本

## この本を読む人に

すぐれた文学者は、この世や人間の眞実や、美をするどくみつめて、その作品にはつきりとえがいてくれております。私たちは、それを読むことによつて、私たちの心をゆたかに、美しくすることができます。

この本には、そうしたすぐれた作家たちの代表的な作品のなかから、さらに少年少女のみなさんが、読むのによさわしいもの、ぜひ読んでもらいたいものを、えらんでのせてあります。そして学校で教わらないむずかしい漢字は、かなに改めたり、その意味をしるしたり、またかなづかいも、現代かなづかいになおして、みなさんにしたしみやすいようにしてあります。

その作品も作家のいろいろな面を示すようにしてありますが、あまりに長すぎて、この本のせきれない作品や、もつとおとなになつてから読んでほしい部分をよくむものは、その一部をとつてのせてあるものもあります。その部分のとりかたもくふうして、その作品のあらましを知られるようにつとめました。

しかし、もちろん原作をこのように改めたといつても、原作の意図およびそ

の味わいなどは、できるかぎり、そこなうことなく伝えることができるよう苦心しました。だから実際は、このまゝを原作と考へても、さしつかへがないと思つております。

最後に、解説として、その作家の一生や、その作品の説明がつけられております。一つの作品をよく味わうには、それがどのような作家によつて書かれたか、その作家の一生、ひととなりを知ることが、きわめたいせつであります。それで初めに、解説のほうを読んでから作品のほうを読むことも、作品をよく理解することができる方法でしょう。

この解説も、それを書いた人々が、たいへん興味ふかく、親切にしろしてくれておりますのできつと、作品を読むように、みなさんの心をひきつけてくれるであります。

編集者 久松 潜 一

伊藤 整

福田 清 人

\* 本文中、唐(中国の名)のように、かっこの中に小活字で入れてあるのは、編集部でつけた注です。

# 森鷗外集もくじ

|           |           |     |
|-----------|-----------|-----|
| 山椒大夫      | きんしやうだ ゆう | 七   |
| 金貨        | きん か      | 三五  |
| 静(戯曲)     | しづか       | 五四  |
| 電車の窓      | でんしゆのまど   | 六五  |
| 塔の上の鶏(翻訳) | とうのうえにわとり | 七一  |
| 朝寝        | あさね       | 八〇  |
| 阿部一族      | あべいちぢく    | 八七  |
| 高瀬舟       | たかせぶね     | 一〇〇 |
| 解説 高木卓    |           | 一三三 |



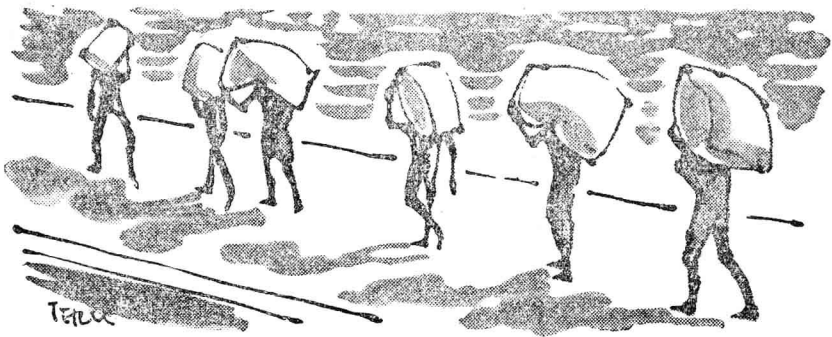
# 坪内逍遙集もくじ

役えんの行者ぎやうじや(戯曲)……………一五三

ベニスの商人しやうじん(戯曲)抄……………二二三

解説 川副国基……………三三〇

そうてい 青山龍水  
カ ッ ト 山本耀也



森 もり

鷗 う

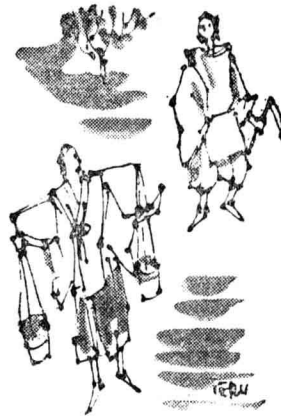
外 がい

集 しゅう





## 山椒 大夫



越後の春日を経て今津へ出る道を、めずらしい旅人の一群れが歩いてゐる。母は三十才をこえたばかりの女で、ふたりの子供を連れてゐる。姉は十四、弟は十二である。それに四十ぐらいの女中がひとりついて、くたびれた同胞(かたがは)ふたりを、「もうじきにお宿におつきなさいませ」と言つてはげまして歩かせようとする。ふたりの中

で、姉むすめは足を引きずるように歩いてゐるが、それでも気が勝つていて、つかれたのを母や弟に知らせまいとして、おりおり思い出したように弾力のある歩きつきをして見せる。近い道を物まいりにでもあるくのなら、ふさわしくも見えそうな一群れであるが、かさやらつえやらかいがいいいでたちをしているのが、だれの目にもめずらしく、またきのどくに感ぜられるのである。

道はひやくしよう家の断えたり続いたりする間を通つてゐる。砂や小石は多いが、秋日よりによくかわいて、しかもねんどがまじつてゐるために、よくかたまつていて、海のそばのようにくるぶしをうめて人をなやますこととはない。

わらぶきの家が何げんも立ちならんだ一構えがは、その林にかこまれて、それに夕日がかつとさしてゐるところに通りかかった。

「まああの美しいもみじをごらん」と、先に立っていた母が指さして子供に言った。

子供は母の指さすほうを見たが、なんとも言わぬので、女中が言った。「木の葉があんなにそまるのでございま

すから、朝晩お寒くなりましたのも無理はございませんね。」

姉むすめがとつぜん弟をかえりみて言った。

「早くおとう様のいらっしやるところへ行きたいわね。」

「ねえさん。まだなかなか行かれはしないよ。」弟はさかしげに答えた。

母がさとすように言った。「そうですとも。今までこして来たような山をたくさんこして、川や海をお船でたびたびわたらなくては行かれないのだよ。毎日精出しておとなしく歩かなくては。」

「でも早く行きたいのですもの」と、姉むすめは言った。

一群れはしばらくだまって歩いた。

むこうからからおけをかついで来る女がある。塩浜しおはまから帰る潮くみ女である。

それに女中が声をかけた。「もしもし。このへんに旅の宿をする家はありませんか。」

潮くみ女は足をとめて、主従四人の群れを見わたした。そしてこう言った。「まあ、おきのどくな。あいにくな所で日がくれますね。この土地には旅の人をとめてあげ

る所は一けんもありません。」

女中が言った。「それはほんとうですか。どうしてそんなに人気が悪いのでしょうか。」

ふたりの子供は、はずんでくる対話の調子を気にして、潮くみ女のそばへ寄ったので、女中と三人で女を取りまいた形になった。

潮くみ女は言った。「いいえ。信者が多くて人気がよい土地ですが、国守のおきてだからしかたがありません。もうあそこに」と言いさして、女は今来た道を指さした。「もうあそこに見えていますですが、あの橋までおいでなされると高札たかふたが立っています。それにくわしく書いてあるのですが、近ごろ悪い人買いがこの辺を立ちまわります。それで旅人に宿を貸して足をとめさせたものにはおとがめがあります。あたり七けんまぎぞえになるそうです。」

「それはこまりますね。子供衆もおいでなざるし、もうそう遠くまで行かれませんか。どうかしようにありませんか。」

「そうですね。わたしのかよう塩浜しおはまのあるあたりまで、あなたがたがおいでなざると、夜になってしまいましょ

う。どうもそこらでいい所をみつけて、野宿をなさるよりほか、しかたがありません。わたしの思案では、あそここの橋の下におやすみなさるがよいでしょう。岸の石垣にびったり寄せて、川原に大きい材木がたくさん立ててあります。荒川の上から流して来た材木です。昼間はその下で子供が遊んでいます、奥のほうには日もささず、暗くなっている所があります。そこなら風も通しませまい。わたしはこうして毎日通う塩浜の持ち主の所にいます。ついそこのは、は、その森の中です。夜になったら、わらやこもを持って行ってあげましょう。」

子供らの母はひとりはなれて立って、この話を聞いていたが、このとき潮くみ女のそばに進み寄っていった。「よいかたに出会いましたのは、わたしどものしあわせでございます。そこへ行って休みましょう。どうぞわらやこもをお借り申しとうございます。せめて子供たちにもしかせたり着せたりいたしとうございます。」

潮くみ女は受け合って、は、その林のほうへ帰って行く。主従四人は橋のあるほうへ急いだ。

荒川にかけわたした応化橋のたもとに一群れは来た。潮くみ女のいったとおりに、新しい高札が立っている。書いてある国守のおきても、女のことばにたがわない。

人買いが立ちまわるなら、その人買いの詮議をしたらよさそうなものである。旅人に足をとめさせまいとして、行きくれたものを路頭にまよわせるようなおきてを、国守はなぜ定めたものか。ふつつかな世話の焼きようである。しかしむかしの人の目にはおきてである。子供らの母はただそういうおきてのある土地に來合させた運命をなげくだけで、おきてのよしあしは思わない。

橋のたもとに、川原へせんたくにおりるものの通う道がある。そこから一群れは川原におりた。なるほどたいそうな材木が石垣に立てかけてある。一群れは石垣にそって材木の下へくぐってはいった。男の子はおもしろがって、先に立って勇んではいった。

奥深くもぐってはいると、ほらあなのようになった所がある。下には大きい材木が横になっているので、とこ

をはったようである。

男の子が先に立って、横になっている材木の上に乗って、いちばんすみへはいつて、「ねえさん、早くおいでなさい」とよぶ。

姉むすめはおそるおそる弟のそばへ行つた。

「まあ、お待ちあそばせ」と女中が言つて、背に負つていた包をおろした。そして着がえの衣類を出して、子供をわきへ寄らせて、すみの所にしいた。そこへ親子をすわらせた。

母親がすわると、ふたりの子供が左右からすがりついた。岩代の信夫郡の住家を出て、親子はここまで来るうちに、家の中ではあつても、この材木のかげより外らしい所にねたことがある。不自由にもしだいになれて、もうさほど苦にはしない。

女中の包から出したのは衣類ばかりではない。用心に持っている食べ物もある。女中はそれを親子の前に出しておいて言つた。「ここではたき火をいたすことはできません。もし悪い人に見つけられてはならぬからでございます。あの塩浜の持ち主とやらの家まで行つて、お湯

をもらつてまいりましょう。そしてわらやこものこともたのんでまいりましょう。」

女中はまめまめしく出て行つた。子供は楽しみに粗糲やら、ほしたくだものやらを食べはじめた。

しばらくすると、この材木のかげへ人のはいつて来る足音がした。「姥竹かい」と母親が声をかけた。しかし心の内には、ははその森まで行つて来たにしては、あまり早いとうたがった。姥竹というのは女中の名である。

はいつて来たのは四十才ばかりの男である。骨組みのたくましい、筋肉が一つ一つ膚の上から数えられるほど、脂肪の少ない人で、牙彫の人の形のような顔に笑みをたたえて、手にずさを持つている。わが家を歩くような、慣れた歩きつきをして、親子のひそんでいるところへ進み寄つた。そして親子の座席にしている材木のはしに腰をかけた。

親子はただおどろいて見ている。あだをしそうな様子も見えぬので、おそろしいとも思わぬのである。

男はこんなことを言う。「わしは山岡大夫という船乗りじゃ。このごろこの土地を人買いが立ちまわるとい

ので、国守くにもりが旅人に宿を貸すことをさしとめた。人買いをつかまえることは、国守くにもりの手に合あわぬとみえる。きどくなは旅人じゃ。そこでわしは旅人を救うてやろうと思おもい立たつた。さいわいわしが家は街道かじちうをはなれているので、こっそり人をとめても、だれにえんりよもいらぬ。

わしは人の野宿をしそうな森の中や橋の下をたずねまわつて、これまでおおぜいの人を連れて帰かへつた。見れば子供衆こどもしゆうがかしを食べていなさるが、そんなものは腹はらの足しにはならないで、齒はにさわる。わしが所ではさしたるもてなしはせぬが、いもがゆでも進ませましよう。どうぞえんりよせずに来てくだされい。」男おとこはしいてさそうでもなく、ひとり言ひとりごとのように言いつたのである。

子供の母はつくづく聞いていたが、世間よこしまのおきてにそむいてまでも人を救たすおうというありがたいころろさしに感あげずにはいられたかつた。そこでこう言いつた。

「承うけたまはれは殊勝しゆしやうなお心がけと存ぞんじます。貸すなというおきてのある宿を借りて、ひよっと宿主しゆくしゆに難儀なんぎをかけようかと、それが気がかりでございますが、わたくしはともかくも、子供らにぬくいおかゆでも食べさせて、屋根の下

に休やすませることができましたら、そのご恩おんはのちの世までもわすれまますまい。」

山岡大夫やまおかたはうなずいた。「さてさてよう物のわかるご婦人ごふじんじゃ。そんならすぐに案内あんないをして進ませましよう。」こういつて立ちそうにした。

母親はははきのどくそうに言いつた。「どうぞ少しお待ちくださいませ。わたくしども三人がお世話せわになるさえ心苦こころくるしゅうございますのに、こんなことを申ますのはいかかと存ぞんじます、実は今ひとり連れつれでございます。」

山岡大夫やまおかたは耳みみをそばだてた。「連れつれがおありなさる。それは男おとこか女おんな子こか。」

「子供たちの世話をさせにつれて出た女中にようぢゆうでございます。湯ゆをもらうと申まして、街道かじちうを三四町さんしようちやうあとへ引き返かへしてまいました。もうほどなく帰かへつてまいりましよう。」

「お女中にようぢゆうかな。そんなら待つて進ませましよう。」山岡大夫やまおかたの落ち着おちいた、底そこの知れぬような顔かほに、なぜか喜びのかが見えた。

ここは直江の浦である。日はまだ米山のうしろにかくれていて、紺青のような海の上にはうすいもやがかかっている。

一群れの客を舟にのせてともづなをといっている船頭がある。船頭は山岡大夫で、客はゆうべ大夫の家にとまつた主従四人の旅人である。

応化橋の下で山岡大夫に出会つた母親と子供ふたりとは、女中姥竹がかけそんじた瓶子に湯をもらつて帰るのを待ち受けて、大夫に連れられて宿を借りに行つた。姥竹は不安らしい顔をしながらついで行つた。大夫は街道を南へはいつた松林の中の草の家に四人をとめて、いもがゆを進めた。そしてどこからどこへ行く旅かと問うた。くたびれた子供らを先へ寝させて、母は宿のあるじに身の上のおおよそを、かすかなともしびのもとで話した。自分は岩代のものである。夫が筑紫へ行って帰らぬので、ふたりの子供を連れてたずねに行く。姥竹は姉むすめの生まれたときからもりをしてくれた女中で、身寄りのないものゆえ、遠い、おぼつかない旅のともをするこゝとになつたと話したのである。

さてここまでは来たが、筑紫の異てへ行くことを思えば、まだ家を出たばかりと言つてもよい。これから陸を行つたものであるうか。または船路を行つたものであるうか。あるじは船のりであつてみれば、定めて遠国のことも知っているだろう。どうぞ教えてもらいたいと、子供らの母がたのんだ。

大夫は知れ切つたことを問われたように、少しもためらわずに船路に行くことをすすめた。陸を行けば、じきとなりの越中の国にはいる境にさえ、親不知子不知の難所がある。けずり立てたような岩石のすそには荒波が打ち寄せる。旅人は横あなにはいって、波の引くのを待っていて、せまい岩石の下の道を走りぬける。そのときは親は子をかえりみることができず、子も親をかえりみることができない。それは海への難所である。また山をこえると、ふまえた石が一つゆらげば、千尋の谷底に落ちるような、あぶない岨道もある。西国へ行くまでには、どれほどの難所があるか知れない。それとはちがって、船路は安全なものである。確かな船頭にさえたのめば、いながらにして百里でも千里でも行かれる。自分は西国

まで行くことはできぬが、諸国の船頭を知っているから、舟に乗せて出て、西国へ行く舟に乗りかえさせることができる。あすの朝はさっそく舟にのせて出ようと、大夫は事もなげに言った。

夜が明けかかると、大夫は主従四人をせき立てて家を出た。そのとき子供らの母は小さいふくろから金を出して、宿賃をはらおうとした。大夫はとめて、宿賃はもらわぬ、しかし金の入れであるたいせつなふくろはあずかっておこうと言った。なんでもたいせつな品は、宿につけば宿のあるじに、舟に乗れば舟の主にあずけるものだと言うのである。

子供らの母は最初に宿を借ることを許してから、あるじの大夫の言うことをきかなくてはならぬような勢いになった。おきてを破ってまで宿を貸してくれたのを、ありがたくは思っても、何事によらず言うがままになるほど、大夫を信じてはいない。こういう勢いになったのは、大夫のことにばに人をおしつける強みがあって、母親はそれにあらがうことができぬからである。そのあらがうことができぬのは、どこかおそろしいところがあるからで

ある。しかし母親は自分が大夫をおそれているとは思っていない。自分の心をはっきりわかっている。

母親はよぎないことをするような心持で舟に乗った。子供らにはないだ海の、青い靨をしたような面を見て、物めずらしさに胸をおどらせて乗った。ただ姪竹が顔にはきのう橋の下を立ち去ったときから、今舟に乗るときまで、不安の色が消えうせなかった。

山岡大夫はともづなをといた。さおで岸を一おしおすと、舟はゆらめきつつうかび出た。

山岡大夫はしばらく岸にそうて南へ、越中境の方角へこいで行く。もやは見る見る消えて、波が日にかがやく。

人家のない岩かげに、波が砂をあらって、みるやあらめを打ち上げている所があった。そこに舟が二そう止まっている。船頭が大夫を見てよびかけた。

「どうじゃ。あるか。」

大夫は右の手をあげて、親指を折って見せた。そして



自分もそこへ舟をやった。親指だけ折ったのは、四人あるという合図である。

前からいた船頭のひとりには宮崎の三郎といって、越中宮崎のものである。左の手のこぶしを開いて見せた。右の手が貨の合図になるように、左の手は銭の合図になる。これは五貫文につけたのである。

「氣ばるぞ」と今ひとりの船頭が言つて、左のひじをつとのべて、一度こぶしを開いて見せ、ついで人さし指をたてて見せた。この男は佐渡の二郎で六貫文につけたのである。

「おうちやくものめ」と宮崎がさげんで立ちかかれば、「出しぬこうとしたのはおぬしじゃ」と佐渡が身構えをする。二そうの舟がかしいで、ふなばたが水をむちうつた。

大夫はふたりの船頭の顔をひややかに見くらべた。

「あわてるな。どっちもから手ではかえさぬ。お客様がごきゅうくつでないように、おふたりずつわけて進ぜる。貨銭はあとでつけたねだんのわりじゃ。」こう言つておいて、大夫は客をかえりみた。「さあ、おふたりずつあ

の舟へお乗りなされ。どれも西国への便船じゃ。舟足というものは、重すぎては走りが悪い。」

ふたりの子供は宮崎が舟へ、母親と姥竹とは佐渡が舟へ、大夫が手をとつて乗り移らせた。移らせて引く大夫が手に、宮崎も佐渡もいくさしかの銭をにぎらせたのである。

「あの、主人にお預けなされたふくろは」と、姥竹が主のそでを引くとき、山岡大夫はから舟をつとおし出した。「わしはこれでおいとまをする。確かな手から確かな手へわたすまでがわしの役じゃ。ごきげんようおこしなされ。」

櫓の音がせわしくひびいて、山岡大夫の舟はみるみる遠ざかつて行く。

母親は佐渡に言った。「同じ道をこいで行つて、同じ港につくのでございませうね。」

佐渡と宮崎とは顔を見合せて、声を立ててわらつた。そして佐渡が言った。「乗る舟は弘誓の舟、つくは同じ彼岸と、蓮華峰寺の和尚が言うたげな。」

ふたりの船頭はそれきりだまって舟を出した。佐渡の